

まだ新興の科学であって、自覚的に問題化されることのほとんどなかった経済学における認識主体への注目を促しているのである。換言すれば、彼は経済学的認識におけるある意味での認識批判を実行しているとみなしてよからう。

ここで本稿の冒頭に例示としてかかげた、バベッジ、ミル、シーニアの実務家論を振り返ってみよう。そこで取り上げた三人を比較すると、たしかに一方バベッジと、他方ミル、シーニアでは理論家と実務家に関する評価が相対立している。だがその中身をよく見ると、理論と経験の関係について双方の立場、とりわけバベッジとミルとはそう異なっていないように思われる。と言うのは、バベッジは経済学者が理論を構築するのに「少なすぎる事実」に基づいていることを批判し、ミルは、実務家が自己の限られた経験によって一定の理論を構成することを難じており、非難の対象とされる主体は正反対であっても非難の論拠は共通しているからである。つまり、妥当な理論を構成するためには十分な経験、事実に基づくべきであるという判断においてこの両者に異同はなく、そのような理解を前提にして理論家と実務家ではいずれが勝っているかという点で双方の陣営が対立しているに過ぎない。

それに対して『修辞学綱要』でのウェイトリは、「経験」概念を独自の立場から否定的に捉え返していた。経験の惰性的な性格を強調しているのであったが、経験に関するそのような理解を踏まえて、『入門講義』でウェイトリはバベッジとミルよりいちだん高次の論理的次元で問題を捉えていると言えよう。すなわち、バベッジとミルの二人が経験や事実を、経済学を学たらしめるための無二の条件としていとも無造作に想定しているのに対して、ウェイトリは経験や事実それ自体の重要性よりも、それらをどのように知るかという問いの必要性を訴え、それを通じて経済学において無反省に前提とされている経験や事実とはそもそも何かという、経済学的認識における根源的問題を彼なりの立場から投げかけているのである。

d) 理論負荷性

以上が『入門講義』第9講での実務家に関連するウェイトリの論述である。これとの照応に留意して第3講を以下で検討することにしよう。

前に述べたように、第3講では『修辞学綱要』第2部の実務家論に関するくだりがほとんどそのまま引用されている。経験があてはまるのは前提にであって、推論にはないこと、経験を通じては過去についてしか知りえないこと、経験に関して民衆の注意すべき三点が指摘されていることが、それに相当する。いずれも実務家の強みとされる「経験」の、経済学における有効性に対して懐疑を提起し再考をうながす内容であったが、それを『入門講義』でも繰り返している。

そうした『修辞学綱要』と『入門講義』が共有する章句に、後者であらたに付け加えられている論点のひとつは、「ことわざ風の格言」で伝授されている。『傍観者はしばしば競技者よりも勝負をよく見ている』（ILPE, p. 68）というのがそれだが、日本流にいうと「岡目八目」を意味し

ていよう。勝負の当事者よりも局外の傍観者の方が戦局を冷静に、客観的に判断できるという格言から、傍観者＝理論家、競技者＝実務家という類比と対置によって、経済学における理論家の優位を裏付けているのである。『入門講義』で新たに付け加えられたこの議論は、格言を使った遠回しの表現ながら、認識の対象としての経験のみならず、認識主体の側にもウェイトリの視線が向けられていることを示唆していよう。

『入門講義』での実務家論が、『修辭学綱要』でのそれよりも、認識主体への関心を自覚的に発展させていることをはっきりと示しているのが、いわゆる理論負荷性についての議論である。ウェイトリによれば、一般に言われる実務家の「経験」と、理論家の「理論」との対比、つまり経験と理論との対比は、実は理論と理論の対比と解するのが正しい。なぜなら、「人間は彼らが観察する現象について、（しばしば無意識に）よかれ悪しかれ推論し、それらの現象の言明 *statements* と推理 *inferences* とを混同し、実際にはそれを知ることなしに（どれほど不十分で粗野であっても）理論化するように形作られている」（ILPE, p. 69）からである。学問的な「すべての主題において」、人は各々の考察対象を虚心に観察してそれをそのまま何の解釈もまじえずに「言明」として言語化しているつもりでいるが、その現実には、言明ではなく推理による理論化であるというのがウェイトリの主張であろう³¹⁾。そうであるとすれば対置されるべきは、一般にそう受け取られているように実務家の経験と理論家の理論ではなく、実務家の「より不完全で粗野な理論」と理論家の「より注意深く構成され、よりおびただしい帰納に基づく理論」ということになる（ILPE, p. 68）。

ウェイトリは、『入門講義』より少し前に『エディンバラ・レビュー』に寄稿した、シーニアの『オクスフォード大学経済学講義』に対する書評において、実務家について次のように言っている。実務家とは「理論の精密さに反対して常識の主張を弁護する」人々のことを指す。そして常識とは、「怠惰の上に生まれた自負心の子にすぎない。あまりに無精で、自分たちが無知なある問題に関して正確な知識を習得する労をとることをせず、しかも同時に、自分たちの無知を認めるのを自負心が許さない人々が、常識の支持者であるという便利な口実のもとに身を隠すのである」³²⁾。つまり実務家とは、常識という「より不完全で粗野な理論」で、ものごとに、したがって経済学の問題に対処する人々のことなのである。『入門講義』において、「いわゆる経験と常識の結果には、理論と対比区別されるような大きな食い違い」（ILPE, p. 70）があると彼が言うのも同様の趣旨と言えよう。

冒頭に掲げたように、経済学においては理論家を差し置いて実務家の経験が頼りにされるといふ現実の存することを、ウェイトリは認めている。だがこれまで紹介してきたウェイトリ自身の

31) この点については、前掲拙稿39ページ。

32) Whately, R. 'Oxford Lectures on Political Economy,' *Edinburgh Review* 48, 1828, p. 176.

論述から、「実務家の経験」と言われるものの実体は、惰性化した常識という一種の理論の網の目に引っかかる限りでの「経験」に過ぎないことが明らかになったと思われる。その点を再確認するには、例によってたくみな比喻での彼の説明を聞くに若くはない。

何人かの人々が、「同一の経済現象の、目撃者あるいは行為者」だと想定することは、同一の本を何人かの人々が別々に読む場合を考えてみるとよい。同じ本も、ある人にとっては「白い紙の上の黒い斑点」にすぎないし、ある人にとっては書かれている言葉はわかっても本の内容はまったく理解できない。他方で、「全体を完璧に理解する」人もいる (ILPE, p. 70)。同様に経済現象に関して「まったく同じ経験」を有していたとしても、彼方、常識を通じて経済現象を眺めるのと、此方、「体系的な研究」(ILPE, p. 75, p. 224)を通じて考察するのでは、例示された読書の場合と類似した結果になる。

ウェイトリの時代の経済学にとって必要とされるのは、「実務家の経験」ではなくて、「理論的思索家の緻密な体系」(ILPE, p. 61)であるというのが、彼の結論と言えよう。別稿で明らかにしたように³³⁾、経済学の専門家としての「理論家」、「思索家」が実行すべき具体的な作業として、経済学における専門用語の厳密な定義をウェイトリは指摘している。実務家が素朴に描き出す「経験」的世界とは異なる、経済学に固有の概念的世界の構築をウェイトリは要請しているのである。

6 むすびにかえて

以上、ウェイトリの実務家論を検討してきた。たしかに彼以前にも、理論家と実務家の対置は見られたが、ウェイトリの場合には本稿での考察をつうじて独自の特徴を指摘できるように思われる。

まず第一に、これまで示してきたようにウェイトリは、経済学的認識における考察の力点を客体的側面から主体的側面へと移行させている点が注目される。経済学における「主体」と言えば、とりたててウェイトリを待たずともアダム・スミスの名をあげれば、ウェイトリより前の世紀にすでに当該理論についての基本的小お膳立ては出来上がっているように見える。しかし、「主体」と言っても、経済(的)主体と経済学的主体とは区別する必要がある。これはけっして言葉の遊戯ではない。経済主体とは、現に経済活動を行っている行為主体を意味している。研究史上あまねく知られているように、スミスにあってそれは正義あるいは慎慮の担い手として同定されている。17世紀以降のイギリスでは、経済学と人間本性の考察とは密接な関係にあったので、スミス以外にも、スミスとは違った仕方でも経済主体について論じた思想家を数えるのは困難

33) 前掲拙稿42-50ページ。

ではあるまい。

これに対して経済学的主体とは、経済活動の当事者ではなく、それら当事者によって繰り返られる経済現象を考察対象として捉える学理的主体を意味している。その点でウェイトリはまさに経済学的主体を問題にしている。そして、真の経済学的主体という観点から見ると、ウェイトリにとっては明らかにその範疇から外れるが一般には必ずしもそうはみなされていない実務家を取りあげて、立ち入った批判的検討を行っているのは、経済学的主体を造形し理論化するための、苦心のそしてたくみな舞台設定と言えよう。というのは、「理論家 vs. 実務家」という図式自体はすでに当時の「常套句」とみなされてよい。したがって、そのような問題設定を通じて、それまでの経済学史上で定式化されてこなかった経済学的主体についての論を展開することは自説を受容せしめるのにひとつの有効な手段と言えるからである。たしかにこれまでの考察からうかがい知られるように、ウェイトリにあってはあるべき経済学的主体を積極的に描き出すというよりも、実務家を批判することを通じてあるべき経済学的主体の相貌を浮き彫りにすることに力点がおかれているかもしれない。しかし、それはすぐ下に述べるような相応の必然性を持つものであって、必ずしもウェイトリ経済学の限界と断ずべきものではない。経済学が「相対的な成熟状態に達した」時期において、経済主体とは区別される経済学的主体という問題を定立したのはイギリス経済学史上、斬新なものと言えよう。

ウェイトリの実務家論の第二の特徴は、より実践的面に見られる。これは本稿中に述べた社会学的次元での特徴である。つまり、ウェイトリにとって「理論家 vs 実務家」の関係はたんに純粹な理論の問題にとどまらなかった。上に述べたように、ウェイトリは「理論家 vs 実務家」の対抗関係に関して、理論家の積極的側面を丹念に描くというより、実務家の批判に力点が置かれていた。それは当時の経済学の制度化の問題状況から説明がつこう。

ルイスの見解を紹介しつつ確認したように、ウェイトリの時代は自然科学の諸分野で個別科学における専門職業化が進行しつつあった。しかし、彼自身がその教授の地位にある経済学においては、学としての権威がじゅうぶんに確立されていなかった。そうした環境下において、経済学と無関係ではないが、やはり経済学における局外者にすぎない実務家を経済学の真の担い手から排除する理論を提起することは、専門の経済学者の地位を正当化し、社会的に認知させるための有力な方策であろう。このような社会学的な観点からもウェイトリ実務家論は興味ある主張と言える。

（中央大学経済学部教授 博士（経済学））